

泉州半田村にて燒素燒は爐に用ひ、藥懸風呂也。仙叟好素燒にて少々小形押形あり。爐に用ゆ、大  
炮烙あり、むかしは底取に用ゆ、長二郎作ある物也。

〔茶道要録<sup>上</sup>主法〕爐同縁之事

一土鍋之事圖アリ、爐風爐共ニ一ツヲ用是ヲ灰土鍋ト云、大ナルヲ下取土鍋ト云、灰土鍋ニ灰ヲ  
盛事、末流ニハ少容ル也、不用七分目バカリ入テ吉杓子ハ俯テ置ベシ、

〔雍州府志<sup>七</sup>土產〕埴田焙爐具、茶人入炭火於埴田盛末灰於焙爐具、以末灰粧爐中、而置炭安釜也、

〔茶道早合點<sup>下</sup>〕下取杓子爐中をならすとき、此

爐の下取、風爐の下取あり、又底とりともいふ、

〔千家茶事不白齋聞書〕灰杓子之事

一爐灰杓子二通り、利茶好みは無紋、是は道安好みは利休一見宜由被申形と成ル、紹鷗好みは形  
角丸の角ニテ柄打延也、横筋有テ菊桐の紋はうらに有、柄は竹之皮ニテ卷、細き青繩ニテ結、樂  
燒灰杓子、紹鷗好とも仙叟好とも云、仙叟にて可有、風呂灰杓子二通り、常體用ルハ、まきみの葉  
形也、又少シ小ぶりにて、きつくりと曲りたるあり、

〔茶道筌蹄<sup>三</sup>〕灰杓子

利休形 桑柄ニクロミさし込 少庵形 桑柄ベウ打火色 宗全形 大判形竹皮卷

仙叟形 同斷大形なり 長二郎形 赤樂燒竹皮卷延付燒なり

〔茶話指月集<sup>上</sup>〕灰さじも、むかしは竹に土器などさしはさめるを、安道<sup>○千</sup>かねにして柄を付たり、

休利<sup>○千</sup>休はじめは道安が灰すくひ、飯杓子のやうなとて笑ひけるが、是も後はそれを用ゆ、

〔茶之湯六宗匠傳記<sup>五</sup>〕小堀遠江守宗甫公自筆の寫

一冬ほうろくへ大灰すくひ計、夏は大小の灰すくひ吉、

灰杓子